



悩める時代の 母親たちを支援するとは

田代 和美

この数年、「子育て支援」に関する活動が盛んに行われている。そのためにこのところ、私も小さな子どもを持つ母親たちに向けて、ないしは母親たちと一緒に話をする機会が増えた。

P T A 活動や園での行事に熱心に取り組み、また子どもの友達の母親とも一生懸命にかかわり、よその子どもたちをしょっちゅう預かり……、そして疲れ果てて自分の子どもに当たってしまうと悩む母親がいる。人のために働く、いわゆるいい人なのである。でも自分の子どもをよその親に託したことはなく、それができないと言う。

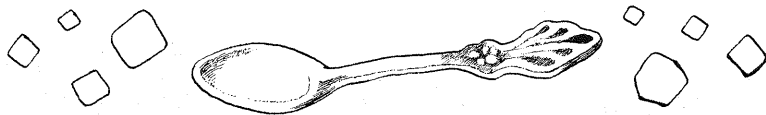
下の子どもが生まれてからの上の子どもとの関係に悩む母親も多い。下の子どもが



生まれてから、上の子どもとの関係がそれまでのようにいかなくなり、どんどん悪循環にはまってしまったのである。上の子どものストレートな甘えを受け入れられなかったり、攻撃の形で向かってくる子どもと真つ向からぶつかってしまったりその様相は様々である。かと思うと下の子どもに対しては余裕を持ってかわいいと思えて育児をしつつ、上の子どもの時はそのようにしてあげられなかったことに対する罪悪感を引きずりながら上の子どもと過ごしている人も多い。そこには自分の子どもとの関係なのに、まだ年端もいかない子どもとの関係なのに、そうとは思えないほどの深刻さがある。それはまた後追いの時期や、二歳代の子ども自身もがいている大変な時期を親の方がもちこたえられないという悩みにも相通じる。

皆ぎりぎりのところで頑張っているのだろう。だから今の悩みを話し始めると途中から涙を伴うことが多い。周りの人がかけてくれる言葉に涙する人も多い。でも何をこんなに深刻になり、頑張っているのだろうか。

今から十年くらい前に私の周りにいた幼い子どもを抱えた母親たちには、何となくお母ちゃんと呼べるものがあつた。見かけではない。幼い子どもを抱えた日々には理屈抜きで浸っているという感じだろうか。いや浸らざるをえない状況だから腹を括って浸ろうという感じだろうか。こんなに子育ての大変さが叫ばれてはいなかったけれど、物理的な面での大変さは今以上だったと思う。だから助け合つて子育てしてきた



仲間という絶大な信頼を今でもおいているし、「そんなこと言ったら（子どもが）かわいそうだよ」というような言葉を投げ掛け合ってお互いの子育てに口を挟んでもいい。子どもを育てていく中で様々な時期や出来事を「そんなものは当然よ」とそう言い切れてしまえるかのような人たちがいた。今思えば、第二子、第三子の母親が多かったこともあるのかもしれない。そういう人たちがいてくれたことで、私はどれだけ助けられたか分からない。仲間であり、かつ先輩でもあった。今、私の周りには幼い子どもを抱えた母親たちは、「母親だけではない私」光線を放っている。だからといって決して母親であることを軽んじているのではない。むしろ一生懸命に子どものことを考えている。だからすべてが逆さまといっていいような文字で子ども同士が、「こんどうちでばーてー（パーティー）をやるからきてね」と書いた手紙をやりとりして遊んでいると「いつですか」と真面目に電話をかけてきたりする。子どもの友達関係を一生懸命に気に掛けているがゆえの行動なのである。そのズレた一生懸命さはお母ちゃんとはほど遠い。そんな中で、多分私も今の母親たちの少し先輩として位置しているのだろう。

はじめにあげた母親たちの深刻さもこのズレた一生懸命さにある。それは額面通りにすべてを受け止め、大人の土俵で子どもとがっぷり四つに組み合おうとする関係と、全く受け止めずに、切ってかわす関係との両極を行ったり来たりしている状況と



も受け取れる。例えば子どもが友達とトラブルを起こすと、面と向かって大人を相手にするような言葉で論し、かと思うとそのうちにそれを聞いている子どもの目つきが悪く、悪く悪く急いで怒鳴ったり叩いたりという力業に出る。手を替え品を替え、「とにかく分かりなさい」と一生懸命なのである。親からすれば子どもに対して譲歩に譲歩を重ね、その譲歩の限界が来ると、百八十度反転して支配するしかないという状況なのだろう。そこには上下関係しか存在しない。子ども同士の世界では、一触即発かと思われる状況が、ひよんなことで笑っちゃう場になったりすることがあるのに。そういう柔らかな関係を生成していく楽しさを実感するにはどうしたらよいのだろうか。

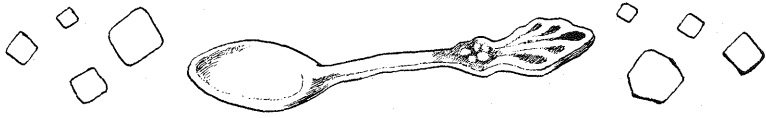
ある市が主催した子育て講座のタイトルは、「親が変われば子どもも変わる」というものだった。何だか対処療法みたいなタイトルだなあと思ったら、案の定、参加した母親（土曜日の開催だったが参加したのはすべて母親だった）たちの多くが、このタイトルに惹かれたと言う。自分を責めているともとれる。しかし自分が変わらなくちゃという思いの先にあるのは、子どもにも変わってほしいという思いなのだ。変わらなくちゃと思っている人が変われる訳はない。変わってほしいと願われている子どもが変われる訳はない。どちらも今の否定なのだから。ある時気づいて、あえて自分が変わろうと思うことも子どもの成長の節目節目ではあるけれど、子どもにも変えられちゃったり、気がついたら変わっていたりという事の方が子どもとの関係では多いよ



うに思う。何でも自分の意志で選択し、決定し、実行する。それは関係の中で生きてはいない。何で私たちはこんなにも頭でっかちになってしまったんだろう。

でも、親同士で話し合っていると、例えば自分の子どもをどうしても否定的に見てしまう親に、「子どもたち同士の間のほうがむしろその子どもの良さを分かっている」と話してくれたり、一緒に考える中で「今日から一日ひとつはよいところを褒めよう!」と対応方略ではあるが、方針を出してくれたりもする。同じような状況にある人たちが、自分や自分の子どものことについては見えないけれど、他の人の話を聞く時には子どもの立場を代弁したりアドバイスする立場になっている。それは回り回って自分に返っていくのだろうと思う。柔らかな関係を生成していくプロセスには、多くの視点を持つことも必要であり、同じような立場にある者同士だから分かり合ったうえでそれを提供できる。

私はこういう場に参加する時には仕事上の立場というよりは、年代が上の子どもを持つ母親という立場で参加するようにしている。その方が、母親たちの構えがなくなり、話しやすいということもあるのだが、本当の所は、十年以上を経てようやく乳幼児期の出来事のあるれこれを含めた状況ともども話せるからという方がむしろ当たっているような気がする。今幼児期にある下の子どものことを話しても、自分を取り繕ってしまうのではないかという心配もある。余裕がなく、頭でっかちで、本当の



ところでは人を頼れず、子どもを見ていてふがいなく思い、そしてまた子どもに申し訳なく思いもし……。今の母親たちを見てみると、かつての自分が重なって見えてくる。そして、でもあるときはそれで精一杯だったんだ、と今だからこそ思えて話せるし、破綻だらけでもそれでも今までの所まあなんとかやってきているよと言える。

親たちは、出口が見えないトンネルの中に入ってしまった、今どこにいるのか、いつまでこれが続くのかが見えなくてもがいている状況にあるのだと思う。その状況に理屈やお説教は通用しない。もう少し長いスパンで子育てを捉えられる者の目で今の状況を定位する手助けをすることで、子どもは先々どんな生活の場が広がり、親以外の多くの大人との出会いの中で育てられる機会を持ち、そしていずれ自分の人生を歩んでいくというトンネルの出口を見通すことで、今の時期の子どもたちの日々に大切なことを逆に考えられるようになればと願う。そしてまた子育ての中ではギブアンドテイクを閉じた関係の中で捉えないことが必要なのだとも思う。誰かに助けてもらったら、その人に対してお返しするという関係はすつきりするが、でも子育てには馴染まない。誰かのおかげで助けられた経験をしたら、自分もできる時に誰かを助けてあげればいいと思えた方がいい。それを世代を越えた連鎖で考えれば、かつてそうだった立場の者だから助けられることもあるのだと思う。

(お茶の水女子大学)